

養 鶏 夜 話

第一話 養鶏産物の強精効果

県養鶏農協参次 福田種鶏場専務取締役 小 野 登志男

種鶏場では、雄が胸を張って雌を10羽～20羽引き連れていばっています。もちろん、これは自然な形ではありません。雌と雄は一對一の比で生まれますから、一夫一婦か多夫多婦が本当の姿でしょう。

ところが鶏を飼ってみると、若雄は1日に30数回も交尾するし、雌は1回交尾すれば、雄から離しても2週間以上も受精卵を産むことが判ったので、欲張った人間共が、卵を産まない雄は最小限度の羽数を雌群の中に入れて飼うようになったのですから、現在種鶏場でみられる姿は、いわば人為的な鶏ハレムというべきでしょう。

それも、徳川時代の文献によると、その当時は雄1羽に雌5羽の割になっていますが、今では1羽が20羽も担当します。だから、映画「女王蜂」の亭主のように、長くは続かない残酷物語でもあるのです。

この精力絶倫の故に、古来鶏の生産物は、鶏卵から内臓まで強精食品としてよく利用されています。大阪のあるマンモス食堂が「今夜間に合う金玉料理」なるものを宣伝し、それをまた有力週刊誌が大きく採り上げて紹介したものですから、鶏産物の強精効果がますます宣伝されるようになりました。

しかし、如何に鶏のキンギョクでも、一對ぐらい食べたのでは、今夜間に合うところまでは参らないでしょう。今夜間に合わせるためには、やはりかなりの量を食べる必要があるのではないのでしょうか。

私は、キンギョクをそれほどたくさん食べた経験

はありませんが、モツが好物で、キモ等は一度に4、5百グラムは食べます。確かに利きます。しかし学者先生は、鶏の肝臓といえども、熱を加えて調理したのでは単なる栄養食品になってしまう。すべからく生のまま食べよ、それも成長期にあるヒナの肝が最も靈驗イヤチコであるぞ、と申します。それなら、孵化場には捨てるオスピナが大量に孵化されますから、それらの肝を利用すれば容易に実験できます。しかし幸いにその実験を行いたいほど切実ではありませんので、未だ試みていません。どなたか実験してやろうと思われる篤志家、あるいは身近そぞろに寂しい人があるなら、何百何千羽でも無料で差し上げますからご遠慮なくお申出下さい。